

拡大する対日貿易

資源・エネルギーを中心に

ブリティッシュ・コロンビア州と日本との貿易関係はすでに半世紀を超えて積み重ねられてきた。とくにここ二十年間の伸びは著しく、現在、日本はBC州にとって、米国に次いで第二の貿易相手国になっている。対日輸出は、恒常的に州の輸出全体の二〇―二五パーセントを占めており、カナダの対日輸出全体の半分以上がBC州産である。BC州はまた、カナダの対日輸出品の積み出し地でもある。一九八一年の州通関対日輸出額は三十七億七千万ドル。日本からの対加輸出全体にはほぼ匹敵する金額の物資が、バンクーバーやプリンス・ルパートから日本へ送り出されているわけである。

BC州産の対日輸出品は、石炭、木材、銅(精鉱)、バルブ、アルミ、水産物など、資源関係の一次産品が最も多い。工業製品は、全体の一〇パーセント、化学製品と資源関連の機械類(掘削用ドリルや林業機械)があるだけである。

日本からの輸入は、乗用車、家電製品、鋼管類、オートバイ、トラック及び車台など、九五パーセントが工業製品となっている。

日本とBC州の経済協力関係は、貿易面でも投資面でも、今後いろいろな可能

性をもっている。日本は今、非鉄精錬部門の近代化を図っており、アルミ、亜鉛などエネルギー多消費型の精錬工場の立地として、原鉱もエネルギーも豊富で安いBC州は、うってつけといえよう。すでに幾つかの日本企業が関心を示している。

BC州への投資としては、安いエネルギー、発達した輸送網、日本と太平洋諸国に近いことなどから、非鉄精錬だけでなく、自動車部品の製造といった製造部門への投資も、今後のBC州・日本間の新しい経済関係を開く道のひとつである。昨年十一月、バンクーバー近郊におけるトヨタ自動車のアルミホイール工場建設計画が正式決定したニュースは、その好例といえよう。

BC州は、日本のエネルギー多様化政策にも協力できる。最近の日本・BC州間のエネルギー・プロジェクトとして、LNGと石炭をあげることができる。

天然ガスは、BC州西部で豊富に採れる。これを摂氏零下百六十二度以下に冷却・液化し、今後二十年間、日本の三電力会社と二ガス会社へ毎年二百九十万トン供給する、というのがこのプロジェクト。この計画の実現には、産地からプリンス・ルパートまでのガス・パイプライ

ンや液化プラントの建設、LNG船の建造などに約三十五億ドルの費用がかかるが、日本はこのうち半分以上を資金協力する予定である。

しかし最近のBC州・日本の協力関係で、最大の話題は、何といっても北東炭の開発・輸出だろう。石炭を主として日本に輸出するために、広大なBC州北東部森林地帯が切り開かれ、炭鉱と都市と自然公園を含む開発地域が出現しつつある。

出炭は今年末から始まり、来年から十五年間にわたって、年間六百七十万トンの原料炭と百三十万トンの一般炭が、プリンス・ルパートの専用埠頭から日本へ

運ばれる。そうなれば、日本の石炭総輸入量の四分の一がカナダ炭になる。(詳細は本紙九頁参照。)

日本とBC州間の貿易に、問題点がないわけではない。第一に、工業製品は日本、原材料はBC州というきわめて偏った構造が徐々にでも是正されない限り、いかに貿易量が増えようと、BC州側に不満が残る。BC州では、日本の消費生活の高度化に見合った輸出品として、たとえば加工食品やレジャー商品などの分野を強化していきたい、としている。針葉樹合板などの林産製品をめぐる関税問題も、今後の解決に残されている。

アジア研究のメッカ アジア・センター

ジョージア海峡を見下ろすグレイ岬の森の中に、ブリティッシュ・コロンビア州で最大・最古の名門、ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)が、アジア研究のメッカになっている。その構内の一番奥まったところに、BC州の首都ビクトリアで客死した新渡戸稲造博士を記念して作られた日本庭園がある。庭園のすぐ手前にあるのが、カナダにおけるアジア研究のメッカともいえるアジア・センターだ。

一九八一年六月に開館したアジア・センターは、もともと大阪万博のときのサンヨー館。UBC宗教学部準教授の飯田昭太郎氏が三洋電機に頼んで、枠組みを寄贈してもらい、日系の建築家が地上二階、地下二階の寄せ棟造り



センターには現在、アジア研究学部、アジア研究所、アジア研究図書館、そして音楽学部、芸術学部、演劇学部のアジア部門がおかれており、UBCにおけるアジア研究とアジアに関する講義や講演、ワークショップなどの中心となっている。

来年五月、ここでセンターに五十万ドルの日本研究資金を寄贈した故大平首相の三回忌と新渡戸博士の没後五十周年を記念して、日本学の国際会議が開催される。